広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第57号　2008　399－408

中国の音楽科教員養成課程における マイクロティーチングの導入と発展

王　　暁　玲

（2008年10月２日受理）

The Introduction and Development of Micro Teaching in Chinese Music Teacher Training Course

Wang Xiaoling

Abstract: Due to the influence of the education system and political movement from the end of 1950s to the middle of 1970s, the professional ability of music teachers was not developed successfully. As a result, micro teaching was adopted as a new method of teacher training, to enhance the professional ability of all teachers including music teachers in China. Concrete research has been conducted in the field of micro teaching concerning its various aspects, e. g. including the necessary and clear teaching skill, execution procedure, evaluation of the improvement of students' professional skill, and microteaching-talking classes. Therefore, this article provides an insight into the following four subjects: "the relation between separate teaching skill and integrated teaching skill", "the topics related to how to decrease the experimental errors and how to adjust the intervals between simulative classes", "the enforcement of microteaching during the teaching practice", and "the establishment of right conceptions about education and children based on the teaching skill training".

Key words: micro teaching, musical teacher training course of China, micro teaching-talking classes
キーワード：マイクロティーチング，中国の音楽科教員養成課程，マイクロー指導案の解説

１．問題の所在

マイクロティーチングは，教員養成プログラムを改善する手段として，1963年にアメリカのスタンフォード大学の研究者たちによって開発された。Allen と Ryan は，マイクロティーチングの基本的概念について，「①マイクロティーチングは，本物の教授である。②マイクロティーチングは，通常の教室教授の多様性を縮小する。③マイクロティーチングは特定の仕事を実施するための訓練に焦点をしぼる。④マイクロティーチングは訓練の中でコントロールの度合を強める。⑤マイクロティーチングは教授におけるフィードバックの次元や反応の結果を知らせる機会を非常に拡大する。」[1] という５つの要素をあげている。このマイクロティーチングは，1970年代末に中国の教師教育界に導入された。その後，マイクロティーチングは現職教員と教員養成課程の学生の教授的技能を向上する方法として，その有効性が中国の教師教育界に幅広く認められるようになった[2]。さらに，1994年に告示された『高等師範学校学生の教員職業技能訓練大綱（試行）』（教育部・以下『訓練大綱』）では，「マイクロティー

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員による審査を受けた。
審査委員：三村真弓（主任指導教員），大塚　豊，棚橋健治，千葉潤之介

チングを「教室での教授的能力」の主な訓練方法として使用すべきである」と指定し，養成段階の学生の「教授的技能訓練」を義務付けている。現在の音楽科教員養成課程においても，マイクロティーチングの修得を教育実習に参加する要件科目としている大学が少なからず存在している[3)]。このように，マイクロティーチングは，今後の中国の音楽科教員養成課程における学生の教授的能力の向上に大きな役割を果たすことが期待される。したがって，中国の音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングの実践と研究の現状を明らかにすることは，マイクロティーチングの今後の発展に有益な示唆と課題を示すと考えられる。しかし，これまでの音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングに関する実践報告と先行研究を概観すると，そのほとんどは各自の実践の報告や，各自の理論の主張に終始している。他者の実践報告と研究を精査し，横断的に先行研究を検討し，さらに中国の音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングの導入の背景，応用と発展の現状及び課題を明らかにしたものはほとんど見当たらない。

そこで本研究は，音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングに関する先行研究と実践報告に対する考察を踏まえて，導入された背景や実践の内容を明らかにした上で，改善すべき問題点と今後の発展の課題を示すことを目的とする。

2．マイクロティーチングの導入（1979年～ 1992年）

中国の教師教育界におけるマイクロティーチングの導入には，２つの要因がある。

第1の要因は，改革開放政策の実施である。中国では，1949年から1979年までの長期間にわたり，政治，経済，教育などの様々な側面における国際的交流がきわめて乏しかった。このため，マイクロティーチングが中国に導入されたのは，それがアメリカで開発されてから16年後の，改革開放政策が始まった1979年のことであった。楊宗義は，論文「微型教学」[4)] にて，スタンフォード式のマイクロティーチングの定義，特徴，及び実施方法などを紹介した[5)]。その後，改革開放政策が推進されるとともに，教育界においても国際的交流がますます増加し，諸外国の先進的な教育理論と方法が導入されるようになった。北京教育学院の孟憲恺は1980年からマイクロティーチングを研究しはじめ，さらに1984年にイギリスのロンドン大学でマイクロティーチングを系統的に学習した。以後，1986年までの約６年間に，マイクロティーチングの基礎理論をより深く理解するために，北京教育学院をはじめとする少数の大学や教育機関でマイクロティーチングに関する様々な検討会，講習会などが行われた。これらの一連の研究活動によって，マイクロティーチングが中国の教師教育界で広範に認識されるようになった。しかし，この期間に発表されたマイクロティーチングに関する資料を見ると，マイクロティーチングの定義，実施方法などに関する紹介文が多い。つまり，1979年から1986年にかけて，中国の教師教育界でのマイクロティーチングに関する研究は単に理解の段階にとどまり，マイクロティーチングの応用及び理論の研究と発展はまだ本格的に行われていなかった。

第２の要因は，1980年代半ばから行われた教員の質的向上をめざした教師教育改革である。

1949年から1980年代半ばまで，中国では初等中等教育の教員数が不足していたため，教員養成教育においては長期にわたって量的な拡大に力を入れ，質的向上を顧みる余裕はなかった。また，1957年から1961年にかけて，「教育は生産労働を社会活動と結ぶ」[6)]，「心理学と教育学に対する厳しい批判と攻撃」[7)]，及び「師範大学は総合大学に見習う」[8)] などの教育運動と方針の告示によって，教員養成教育において教授的能力の向上が軽視されることになった。当時の音楽科教員養成課程では，ピアノ，声楽，及びソルフェージュなどの実技科目が重視され，音楽科教授法の授業が軽視される傾向があった。さらに，文化大革命の実施によって，教員養成教育を含むすべての教育は大きな被害を受けた。1966年から1970年の間，教員養成教育は一時的に廃止された。1971年から一部で復活されたが，「心理学」と「教育学」に対する誤った批判は未だ認識されず，養成課程における教職に関する科目が徹底的に否定された。このような中国の教員養成教育の全体的背景のもとで，音楽科教員養成課程で養成された音楽科教員の教授的能力の低下という問題は80年代末まで続いた。

改革開放政策が実施されてから，中国は市場経済体制へと転換し，初等中等教育及び教師教育が再び重要視されるようになった。1985年に告示された『中共中央の教育体制改革に関する決定』の中で，「数量だけではなく，合格する教師の隊伍（集団）を建設し・・・」と示されている。1986年に『中華人民共和国義務教育法』が公布され，さらに，1987年に行われた『全国高等師範教育工作会議』では，教育学と心理学などの科目の復活，及び教育観察と実習の復活に関して議論された。その後，『中国教育改革と発展綱要』（1993年），『訓練大綱』（1994年），『教師資格条例』『中華人民共和国教師法』（1995年），『師範教育の改革と発展に関

する意見』（1996年），『中共中央・国務院による教育改革の深化と資質教育の全面的推進に関する決定』（1999年）などの一連の公的文書の告示によって，中国の教員養成教育は「数量満足型」から「質的向上型」へと大きく転換され，現職教員と養成段階の学生の教授的能力の向上が強調され始めた。

質的向上をめざす新しい中国の教員養成教育では，実際の教授経験がない学生の教授的能力をいかに向上させるかに，その改革の重点が置かれていた。マイクロティーチングの導入は，この課題を解決する1つの重要な手がかりとなった。言い換えれば，1980年代半ばからの一連の教育の改革が行われたからこそ，マイクロティーチングは中国の教師教育界で広範囲にわたって本格的に発展したといえる。教員養成課程の改訂は，カリキュラムの全体的な改革から，具体的な科目の内容や指導法などの改革へと徐々に深まり，マイクロティーチングが新しい指導法として採用された。その結果，音楽科教授法の授業においてもマイクロティーチングが導入されることとなった。

3．マイクロティーチングの応用と発展（1992年～現在）

マイクロティーチングを研究する教育機関や研究者，及びマイクロティーチングに関する国際的な研究・実践がますます増加したことによって，マイクロティーチングは中国の教師教育界にさらに広がっていった。当時，北京教育学院を始めとして，様々な講習会や研究会，及び小・中学校の教員の教授的能力に関する調査などが実施された。それらの試みの成果として，1992年に『マイクロティーチング基礎教程』[9]が出版された。以降，短期間のうちにマイクロティーチングの応用に関する実践報告，及びマイクロティーチングの理論に関する多くの研究論文が発表された。1999年，2000年，及び2002年には北京教育学院の紀要の別冊として，マイクロティーチングの特集号が出版された。これらのことによって，中国の教師教育におけるマイクロティーチングの重要性がいっそう明確にされただけではなく，マイクロティーチングのその後の発展に堅固な土台が築かれた。さらに，1996年から中国の研究者たちはマイクロティーチングをいっそう発展させ，「指導案の解説」という現職教員研修の方法と結びつけ，「マイクロー指導案の解説」[10]（Microteaching-Talking classes）という新しい理論を作り出した。

中国の音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングの応用に関しては，郁正民[11]の著書によると，ハルビン師範大学音楽学院で1983年から「中学音楽教学論」でマイクロティーチングを用い，師範生の教授的技能の訓練を行っていたことが明らかになっているが[12]，当時の具体的な実施方法などに関する研究論文や実践報告はない。音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングに関する最初の実践報告は，郁正民（2000）の「教室教授の技能訓練とマイクロティーチングー音楽科授業におけるマイクロティーチングの理論と実践」[13]であった。そのため，中国の音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングの実践的な応用と発展は同時に進行したといえる。その特徴を明らかにするために，マイクロティーチングの教授的技能の分類，実施手順，評価，実技科目での応用，及びマイクロー指導案の解説という５つの点に分けて述べる。

(1) 教授的技能の分類

マイクロティーチングの目標は個々の教授的技能を訓練することにあるので，マイクロティーチングを行う前に教授的技能を細分化しなければならない。スタンフォード式の教授的技能の要素は，「①刺激を様々に変化させること，②授業構成，③環境，④無言と非言語的手がかり，⑤生徒を熱心に参加させる方法，⑥頻繁な質問，⑦誘導的な質問，⑧より高度な質問，⑨分散的な質問，⑩望ましい行動の承認，⑪例証と例示，⑫解説，⑬あらかじめ計画した反復，⑭コミュニケーションの完結性」[14]である。スタンフォード式の技能分類に基づいて，孟憲恺（1992）は中国の小・中学校の授業の実際をもとにし，「①導入技能，②言語表現技能，③板書技能，④変化技能[15]，⑤演示技能，⑥解説技能，⑦発問技能，⑧強化技能，⑨終了技能，⑩授業管理技能」，という10の教授的技能を明らかにし，彼以降の中国におけるマイクロティーチングの教授的技能分類に関する研究と実践に一定の理論的根拠を提示した[16]。その後，多くの研究者や実践者が様々な教授的技能の分類を行ったが，それらは孟の影響を強く受けたものが多い。音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングの教授的技能の分類は，孟の分類方法に基づいた上で，学年別，分野別という新たな分類を加えたものが見られるようになった。

郎親華（2004）は，単に教授的技能の内容を提示するだけではなく，表1に示しているように，各学年にふさわしい難易度の教授的技能を提示し，マイクロティーチングによってその定着を図る方法を提案し，「音楽基礎理論」と「音楽教授法」の授業で実践した[17]。このことから，郎が学年を追った段階的な教授的技能の養成をめざしていたことが分かる。

また，郁（2004）は授業に関する教授的技能だけではなく，授業を取り巻く広範な知識を学習する技能，

例えば，論文の書き方や，研究の進め方に関する技能も視野にいれてマイクロティーチングを研究，実践している[18]。朗と郁の教授的技能の分類で共通しているのは，「導入技能，演示技能，解説技能，管理技能，発問技能，変化技能」という６つの教授的技能である。この６つの教授的技能はすべて孟の分類と一致している。これらは教師の授業中の行動に関する技能であり，中国の音楽科教員養成課程では，授業中の教授的技能の向上が重視されていることがわかる。

さらに，胡艶（2004）は，音楽大学のソルフェージュ専攻の学生を対象として，ソルフェージュの授業において，①学生が将来大学等でソルフェージュの授業を担当することを考慮して，ソルフェージュの授業を行うのに必要な教授的技能を養成，訓練する，②学生自らのソルフェージュ技能を向上させる，という２つの目標に基づいて，マイクロティーチングの実践を行った[19]。表３に示されているように，胡はソルフェージュの内容によってソルフェージュの教授的技能を分類している。しかし，ソルフェージュの学習内容だけの視点から教授的技能を分類しているために，郎と郁の一般的視点で示されたような内容をどうやって学習させるかという教授的技能そのものが欠如している。このため，実際には，学生たちが教授的技能よりも音楽実技そのものを重視してしまう可能性がある。

以上の３つの研究における教授的技能の分類方法を表４のように整理した。郎と郁の一般的視点による教授的技能の分類には，大きな相違は見られず，いずれも孟の分類方法に基づいて分類されているといえる。郁と胡は音楽科の特徴を十分に考慮し，教授的技能を音楽的視点からも分類している。しかし，これらの分類法には，いずれも表４に示した「一般的視点」，「音楽的視点」，あるいは「学年別視点」のいずれかが欠けており，より多面的かつ全体的な視点から教授的技能の分類を行い，さらにそれらの教授的技能を養成段階の全体にわたって，各学年に配当して習得させることが望ましいと考えられる。

表１　郎親華による学年別音楽科教授技能訓練計画

大学１年後期	大学２年	大学３年	大学４年
導入技能 終了技能	解説技能 発問技能 演示技能	管理技能 変化技能 強化技能	総合的 な技能

（「教師角色模擬教学的実践和探索」『遵義師範学院学報』第６巻（２），2004年，pp.90-91，に基づき筆者作成）

表２　郁正民による音楽科教授技能の分類

一般的視点		音楽的視点
①管理技能	②導入技能	① 音楽的表現する技能
③演示技能	④解説技能	② 範唱、範奏の技能
⑤発問技能	⑥観察技能	③ 創作と編曲の技能
⑦強化技能	⑧変化技能	④ 授業づくりの技能
⑨終了技能		⑤ 教学研究の技能

（『音楽微格教学法』上海音楽出版社，2004年，目次に基づき筆者作成）

表３　胡艶によるソルフェージュ教授技能の分類

教授技能	内　　容
聴取に関する教授技能	音程、和音、リズム、調、作品の様式
視唱に関する教授技能	読譜、ピッチ（音高）、音程、拍子、リズム、調
書取りに関する教授技能	単音旋律、和音旋律

（「浅談微格教学法在視唱練耳専業教学中的応用」『芸術教育』2004年第３期，p.41，に基づき筆者作成）

表４　郎，郁，胡の教授技能の分類と訓練方法の相違

	一般的視点	音楽的視点	学年別視点
郎（2004）	○	×	○
郁（2004）	○	○	×
胡（2004）	×	○	×

(2) マイクロティーチングの実施手順

中国の音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングに関する教授的技能の分類は，スタンフォード式の分類方法より新たに開発されているが，実施手順においては，大きな変化は見られない。

範暁君（2002）[20]と葉巧妍（2003）[21]は，それぞれ図１と図２のような実施方法を提案し，実践した。図３を見ると，郁正民（2000）[22]は，スタンフォード式の実施手順より１回模擬授業を多く行っているが，ほぼ同じ手順である。しかし，郁のマイクロティーチングの実施手順は，次のような特徴をもっている。すなわち，①第１回の模擬授業においては，模範授業を見せることなく，学生に自らの考えによって指導案を作成させて，模擬授業を行わせること，②模擬授業と模擬授業の間に1.５～２か月の間隔をあけることである。

図１　範暁君によるマイクロティーチングの実施手順

（「高師音楽教学法課程改革的構想」『星海音楽学院学報』2002年第２期，pp.78-80，に基づき筆者作成）

(3) マイクロティーチングの評価

すべての教育活動と同様に，マイクロティーチングによる訓練が有効であったかどうかを評価する必要がある。郁正民（2000）は，マイクロティーチングの量的評価表を考案し，毎回の模擬授業の後にクラス全員に評価させている[23]。評価の項目を，「授業づくり，指導方法，児童・生徒の能力の育成，児童・生徒の動き，教具・説明，板書，言語と表現，児童・生徒の学習効果」という８つに分け，さらにそれぞれの具体的な評価基準を設けている。これらの具体的な評価基準に基づいて，「レベル１，レベル２，レベル３」という段階に分けている（表５）。郁が立案したマイクロティーチングに関する量的評価表は，評価項目と評価基準からより具体的な評価内容を評価者と被評価者に提示することによって，マイクロティーチング訓練に参加する学生に，教授的技能を明確化させたうえで，具体的な達成目標も明示している。この点で，この量的評価表は重要な意味をもっていると考えられる。

図2　葉巧妍によるマイクロティーチングの実施手順
（「微格教学在音楽教学技能訓練中的応用」『星海音楽学院学報』第２期，2003年，pp.90-91，に基づき筆者作成）

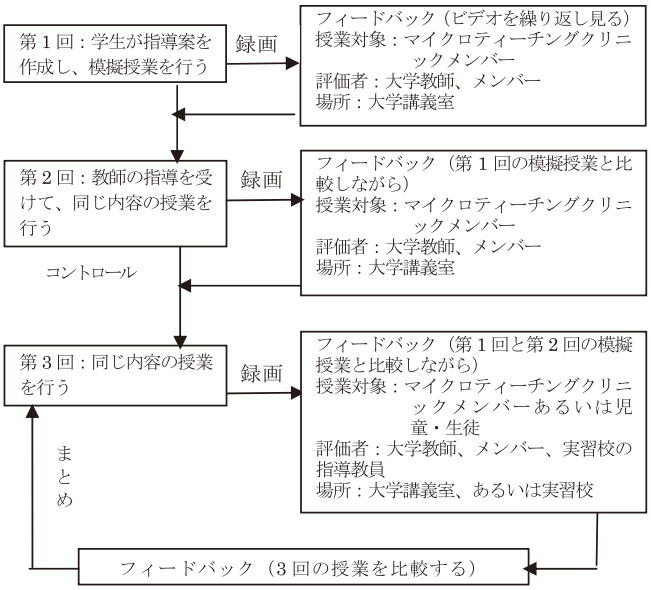

図3　郁正民のマイクロティーチングの実施手順
（「課堂教学技能訓練与微格教学－兼談音楽課堂微格教学的理論与実践」『芸術研究』2000年第３期，p.58）

表5　郁正民による音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングの評価項目と基準

氏名		学年 クラス		授業 テーマ		授業の領域			
評価項目	評価基準					レベル１	レベル２	レベル３	採点
授業づくり	明確なねらいをもつ、重点を明確にする、難点を解決する、適切にまとめる、適切な難度や量の授業内容を選択する、授業の難点を正しく解決する					10-8	7-5	4	
指導方法	啓発性・柔軟性・創造性がある、知識の解説が順を追って一歩一歩進められている、筋道が明確である、脈絡がある、臨機応変に問題に対処している					20-18	16-13	11	
児童・生徒能力の育成	思考の訓練、独学能力・観察能力・表現能力・実際の操作能力の育成					10-8	7-5	4	
児童・生徒の動き	授業への興味が深い、集中力が高い、思考と操作を結びつけている、活動へ積極的に参加する、積極的に発言する、よく質問する、授業の雰囲気が和やかである					15-13	12-10	7	
教具・説明・演示	概念が正確である、論拠と説明対象が明確である、論理的である、教具を創造的に活用する、教具の大きさは適切である、教具操作に熟達している					20-18	16-13	11	
板書	配置、大きさ、漢字の正確さ					10-8	7-5	4	
言語と表現	適切な大きさの声、標準語の使用、穏やかで生き生きした態度と表情					10-8	7-5	4	
児童・生徒の学習効果	授業の内容を85%以上の児童・生徒が理解・把握できる、時間を適切に配分する					10-8	7-5	4	
合計									
記述評価（特に気になる点）									

（「課堂教学技能訓練与微格教学－兼談音楽課堂微格教学的理論与実践」『芸術研究』2000年第３期，p.58）

しかし，これらの評価項目と評価基準がどのようにして作成されたかについて，郁は触れていない。したがって，これらの評価項目と評価基準の妥当性と信頼性は今後検討すべき課題となるであろう。また，彼の評価項目の設定は，前述した教授的技能の分類のうち，一般的視点からの教授的技能のみであり，音楽的視点からの教授的技能を評価していない。音楽的視点からの教授的技能をどう評価するかが課題である。

(4) 教科技能訓練（実技科目）での応用

マイクロティーチングは，教員養成課程に在籍する学生の教授的技能と実践的能力を向上させることに応用，実践されている以外に，教科の実技技能，たとえば，体操動作の技能，声楽の発声・表現技能，書道の技能などにも応用，実践されている。このような傾向は，1995年から現在まで続いている。音楽科の実技技能の向上に関して，声楽の技能の向上にマイクロティーチングが応用，実践されている典型的な２つの例がある。

劉学勇と周官宗（2002）は，マイクロティーチングを音楽科教員養成課程の声楽授業に応用することによって，従来の「一対一」の授業から，「一対多数」の授業へと転換させた[24]。万婉治（2005）も，マイクロティーチングを音楽科教員養成課程の声楽授業において実践した[25]。視聴覚機器を使用し，録音や録画によって，授業後に学生が声楽授業の過程を何度も観察し，自分の良さと改善すべき点に気づき，技術を向上させることができる，とこれらの研究では主張されている。上記２つの研究で，いずれもマイクロティーチングの要素の１つである視聴覚機器を利用したことはマイクロティーチングの特徴の１つであるが，ある特定の技能に焦点を当てた訓練は見られない。さらに，マイクロティーチングのその他の特徴，例えば被訓練者同士による相互評価という特徴も見られない。

(5)「マイクロ－指導案の解説」

マイクロティーチングを模倣，応用する段階において，1996年前後から新たな展開が見られるようになった。前述したように，1979年～1995年までは，中国の教師教育界におけるマイクロティーチングの応用と実践は，スタンフォード式のマイクロティーチングと大差なかったが，そのような状況が1996年から急転し，マイクロティーチングが中国の他の教育理論と結合され，より中国的な方向へ発展し，新たな段階に入ってきた。

その新しいマイクロティーチングに関する代表的な理論として，「マイクロ－指導案の解説」が挙げられる。これのもととなった中国の教育理論が「指導案の解説」である。

「指導案の解説」は1987年に河南省新郷市紅旗区教育研究室によって開発された。「指導案の解説」とは，教師・他の学生の前で，指導案を作成した際の自分の考えと理論的根拠を示し，学習過程とその効果を想像し，それらを説明することである。そして，教師や他の学生の意見を受けて，指導案及び指導案作成の考えを見直すという授業研究の方法である[26]と定義されている。「指導案の解説」には次の特徴がある。すなわち，①「解説」を主要な表現形式としている。②時間は約15分～20分程度である。③教育学と教授学の理論に基づいて，教授内容と児童・生徒の実際の状況に配慮して行われる。④対象は児童・生徒ではなく，教師あるいは学生同士である[27]。「指導案の解説」では「話す者」と「聞く者」のコミュニケーションが重視される。マイクロティーチングと同様に，「指導案の解説」はそもそも中国の現職教員研修の１つの方法であった。当時，週に１回程度の集団授業研究では，すべての教員が作成した指導案を説明する時間的な余裕がなかった。この問題を解決する方法として，山西省教育学院が「マイクロ－指導案の解説」を開発した。そこでは，マクロティーチングの小規模性，厳格なコントロール，及びフィードバックという優れた特徴が取り入れられている[28]。

「マイクロ－指導案の解説」の実施方法は基本的に２つがある。第１は，マイクロティーチングの実施方法をそのまま用い，ただ模擬授業の実施を指導案の解説の内容に転換するものである。第２は，マイクロティーチングの実施方法を発展させた方法(図４)である。

李暁燕（2004）は，師範学院音楽科教員養成課程の学生60名を対象として，「音楽科教授法」の授業で，「マイクロ－指導案の解説」の方法を用いた授業を実践した[29]。具体的な実施方法は，30人ずつを実験群と統制群に分けて，実験群に図５の内容と手順によって「マイクロ－指導案の解説」を行うものである。李は，マイクロティーチングの小規模クラスと短い授業時間，

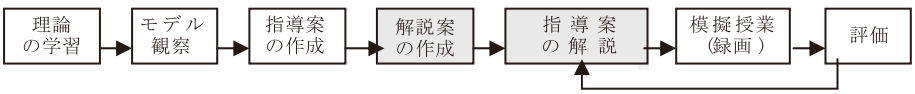

図4 「マイクロ－指導案の解説」の実施方法

（「説課与微格教学的結合探析」『重慶教育学院学報』第18巻（1），2005年，p.97に基づき筆者作成

厳格なコントロール，及びフィードバックという特徴を保ちながら，教材（教科書），授業目標，児童・生徒の状況，指導方法などの授業を構成する重要な要素を，マイクロティーチングの形で，養成段階にある学生に分析，検討，議論させた。

さらに，李は「マイクロー指導案の解説」の評価方法も提案した（表６）。評価項目と評価基準の作成は，自らの経験，専門家の意見，及び多くの先行研究の検討などの方法によって行われた。図５と表６から，李が「マイクロー指導案の解説」の訓練内容に配慮しながら，評価項目と評価基

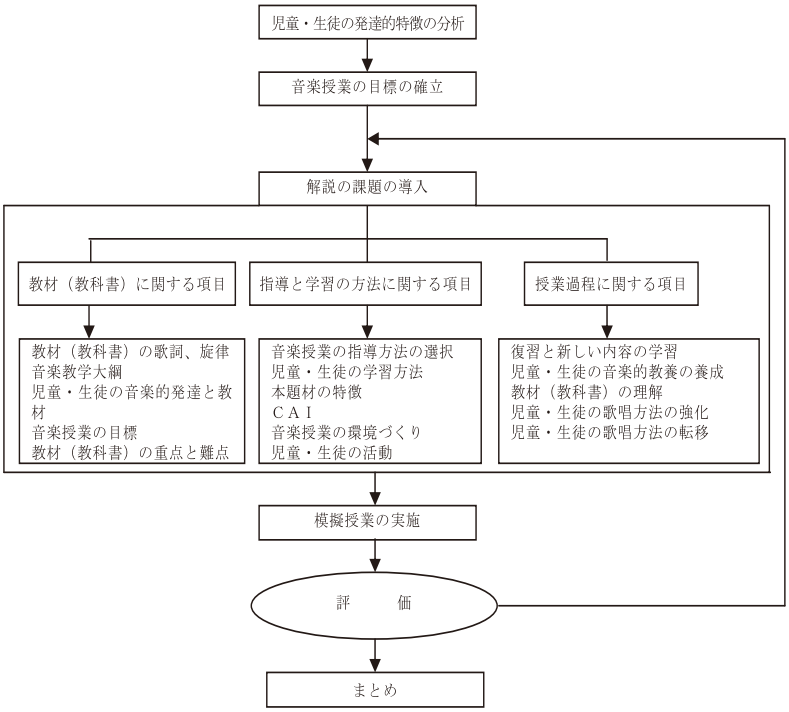

図５　李暁燕による「マイクロー指導案の解説」の内容と手順

（「高師音楽教育専業学生『説課』微格教学設計与評価研究」『楽府新声』2004年第３期，p.69）

表６　李暁燕による「マイクロー指導案の解説」の量的評価表

解説者：		テーマ：	領域：		
評価項目		評価基準	レベル	配点	
大項目	小項目		ABCDE	小項目	大項目
教材	歌詞・旋律の内容 重点と難点 教授目標 教材理解	・教材の歌詞・旋律及び教授内容の位置づけを正しく理解する ・児童・生徒の状況にふさわしい重点と難点を把握する ・操作性の高い、児童・生徒の状況にふさわしい目標を確立する ・児童・生徒の学習転移を考慮したうえで、目標に基づいて教材を理解し、整理する		0．15 0．25 0．36 0．24	0．25
指導法	指導法の選択 指導法の理解 指導法の運用	・音楽科の特徴と音楽科教育課程改革の方針に基づいて指導法を選択する ・選択した指導法の意味と用い方を正しく理解できる ・選択した指導法に熟達し、その指導法の特徴を十分に生かす		0．36 0．3 0．34	0．15
学習法	学習法の選択 学習法の指導	・指導法に合わせて、音楽科の特徴と児童・生徒の発達的特徴にふさわしい学習法を選択し、より正しく、具体的に説明できる ・選択した学習法を児童・生徒に理解、応用させ、さらに学習法の思考方法を身につけさせ、よい学習態度と習慣を養わせ、学習能力を向上させる		0．51 0．49	0．15
授業過程	授業構造 授業手順 教師と児童・生徒の活動 指導と学習の効果	・授業構造は明確である ・授業の各段階を密接につなげ、重点を明確にし、難点を解決し、時間の配分を合理的に行う ・教授と学習のバランスを調和させ、教師・児童・生徒いずれも教授目標をめぐって行動し、教師の「主導性」と児童・生徒の「主体性」を強調する ・具体的な授業づくりと関連づけて指導法と学習法の効果を説明でき、授業目標の達成度を予測できる		0．23 0．25 0．25 0．27	0．25
のその能力他	言葉 態度と表情 範唱 伴奏	・標準語を使用し、表現は豊かで、倫理的である ・自然で、穏やかな態度と行為である ・発声と発音は正確で、声はまろやかで、自然であり、表現力のある範唱を行う ・調と和声を正確に使用でき、伴奏を曲想と一致させる		0．42 0．28 0．15 0．15	0．2

（「高師音楽教育専業学生『説課』微格教学設計与評価研究」『楽府新声』2004年第３期，p.70）

準を設定したことを読み取ることができる。

音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングと「マイクロー指導案の解説」に見られる共通点と相違点を表７に示した。時間や，実施方法などについて両者が共通していることが分かる。「マイクロー指導案の解説」は授業づくりの方法と技能を中心として訓練を行うので，実際の教授的技能よりも，指導案の作成と授業づくりの能力の向上により有益であると考えることができる。言い換えると，マイクロティーチングの訓練は教授の外面的行動の熟練度，「マイクロー指導案の解説」の訓練は教授の内面的思考の論理性をそれぞれ養成するといえる。

４．音楽科教員養成課程における マイクロティーチングの有効性

マイクロティーチングの有効性は，多くの実践報告で述べられているが，ここでは，量的評価を行った郁正民と李暁燕の音楽科に関する実践結果を示す（表８，９）。両実践とも，マイクロティーチングの実施によって，学生の教授的技能が以前よりも向上したという結果を得ている。

５．中国の音楽科教員養成課程における マイクロティーチングの課題と示唆

(1) 個々の教授的技能と総合的な教授的技能

以上の音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングの実践は，いずれも音楽科教員養成課程における学生の個々の教授的技能の訓練を主として行っていた。

分類された個々の教授的技能，例えば，導入技能，説明技能などがマイクロティーチングによって集中的に訓練されている。しかし，実際に授業を行うときに

表７　マイクロティーチングと「マイクロー指導案の解説」の共通点と相違点

	マイクロティーチング	マイクロー指導案の解説
共通点	・小規模（時間・人数）での訓練 ・訓練内容の細分化 ・模擬授業の実施 ・フィードバックの重視	
相違点	・模擬授業の実施 ・対象：児童・生徒（あるいは児童・生徒の役を演じる学生） ・目標：限定された教授に関する基礎的な教授技能の訓練	・授業づくりの論拠の議論 ・対象：学生同士 ・目標：授業づくりの能力の訓練

（「高師音楽教育専業学生『説課』微格教学設計与評価研究」『楽府新声』2004年第３期，pp.68-71，アレン，D.／ライアン，K.（笹本正樹，川合治男共訳）『マイクロティーチング：教授技術の新しい研修法』，協同出版，1979年，に基づき筆者作成）

表８　郁正民によるマイクロティーチングの実施前後の学生の教授的能力の評価

訓練項目		授業づくり	指導方法	児童・生徒能力の育成	児童・生徒の動き	提示演示	板書	言語と表現	児童・生徒の学習効果
実践前	レベル１	０人	０人	０人	０人	０人	０人	０人	０人
	レベル２	１人 ４．８%	３人 14.3%	３人 14．３%	７人 33．３%	６人 28.6%	９人 43．９%	８人 38．１%	８人 38．１%
	レベル３	20人 95.2%	18人 85.7%	18人 85．７%	14人 66．７%	15人 71.4%	12人 57.1%	13人 61．９%	13人 61．９%
実施後	レベル１	３人 14.3%	１人 ４．８%	２人 ９．５%	４人 19%	５人 23.8%	６人 28.6%	７人 33．３%	６人 28．５%
	レベル２	16人 72.6%	18人 85.7%	17人 81．０%	14人 66．７%	12人 57.2%	15人 71.4%	10人 47．６%	12人 57．２%
	レベル３	２人 ９．５%	２人 ９．５%	２人 ９．５%	３人 14．３%	４人 19.0%	０人 ０．０%	４人 19．０%	３人 14．３%

（「課堂教学技能訓練与微格教学－兼談音楽課堂微格教学的理論与実践」『芸術研究』2000年第３期，p.59）

表９　李暁燕による「マイクロー指導案の解説」の実験結果

	人数	最高得点	最低得点	平均値	標準偏差	変動係数
実験群	30	93	76	83．32	３．31	４．16
統制群	30	76	54	68．25	２．19	３．51
t＝21．50						
p＜0．01						

（「高師音楽教育専業学生『説課』微格教学設計与評価研究」『楽府新声』2004年第３期，p.71）

は教授的技能を個別に用いるわけではないので，総合的な教授的技能の訓練も重視する必要があると考える。そのためには，個々の教授的技能の訓練が終了してから，５分間の模擬授業を10分間まで延長し，２～３の関連のある教授的技能を総合的に訓練することが必要であろう。

(2) 実施手順について

スタンフォード式のマイクロティーチングの実施手順と違う特徴を有していたのは，郁の実施手順であった。前述したような郁によるマイクロティーチングの実施手段の２つの特徴を考えてみれば，次のことが考えられる。つまり，①の特徴から，学生自らの創造力と想像力を活用できるが，試行錯誤にも時間がかかると推測できる。また，②の特徴から，模擬授業の間を長くとることによって，学生は十分な思考と訂正の時間をもつが，教授的技能の訓練の連続性を欠く可能性も生じる。このように考えると，郁が提示したマイクロティーチングの実施手順には，次のような改善点が挙げられるであろう。①第１回の模擬授業の前に，模範授業の要素を抽出し学生に提示すれば，試行錯誤の時間が比較的に減少する可能性が高い。②また，模擬授業と模擬授業の間隔期を１週間～２週間に縮小しても，思考と訂正の時間は十分であり，訓練の連続性も保たれる。

(3) 教育実習とのつながり

教育実習前において，体系的なマイクロティーチングを実施することが，学生の教授的技能の向上と教育実習の成果に，大きな役割を果たすであろう。しかし，現在の中国の音楽科教員養成課程において，マイクロティーチングの履修が教育実習の要件として義務付けられているところが多いものの，教育実習の中間指導，及び事後指導と関連付けている例は未だ少ない。これは，中国のほとんどの教員養成大学で，マイクロティーチングの訓練を実施する部門と教育実習を実施する部門が分けられていることに起因している。従って，教員養成課程の改革においては，大学の各部門間の連携も必要となるであろう。

(4) 教育理念と技能訓練との関連

以上考察したすべての実践は，マイクロティーチングに関する技能分類と実施手順だけに注目しており，教育理念が教授行為に与える影響を看過していた。確かに技能は訓練をとおして向上させることができるが，教授的技能は教育観，児童観などからも影響を受けるので，訓練だけでは不十分であろう。そこで，音楽科教員養成課程におけるマイクロティーチングの訓練を教育理念の育成との結びつけることもいっそう望まれる。

６．おわりに

現在の中国の音楽科教員養成課程の改革は，「教科科目重視型」のカリキュラムから「教職科目重視型」のカリキュラムへの転換を中心として行われている。しかしこの転換は，教科科目と教職科目の開講科目数と授業時間数の調整に過ぎず，音楽科教員養成課程の内容まで浸透していない大学がほとんどである。つまり，改革の理念はカリキュラムの構造には反映されているが，カリキュラムの内容と方法，特に教科科目にはあまり反映されていない。前述した実践例を見ると，劉学勇と周官宗（2002），および万婉治（2005）は声楽授業でマイクロティーチングの方法を用いたが，音楽的技能を訓練することを目的としている。教員養成課程の学生の教職意識をいっそう強化するために，教科専門科目でもマイクロティーチング，あるいは「マイクロー指導案の解説」という方法を取り入れる必要があると考える。

また，「マイクロー指導案の解説」によって，学生は指導案を作成した際の内面的思考を言葉を通して外面的に表現することができ，彼らの内面的思考をより具体化させることができる。マイクロティーチングが「手」の問題を解決できるとすれば，「マイクロー指導案の解説」は「脳」の問題を解決できるといってもよいであろう。すなわち，マイクロティーチングと「マイクロー指導案の解説」とを結びつけて，音楽科教員養成課程の学生の教授的技能を訓練すれば，よりよい効果を得ることができると考える。

【注及び引用文献】

１）D. アレン, K. ライアン（笹本正樹, 川合治男共訳）『マイクロティーチング：教授技術の新しい研修法』，協同出版，1979年，p.3

２）1980年～2006年にかけて，中国の学術雑誌に載られている多くの実践報告から，その有効性が見られる。例えば，金偉生（1994）「実習在高師音楽教育中的地位和作用」，張錦華（1998）「関与高師音楽専業学生素質培養的再思考」，劉延新（2001）「談高師音楽教育与中小学校音楽教学需要的矛盾」などである。

３）例えば，東北師範大学，首都師範大学，ハルビン師範大学，瀋陽師範大学などの大学がある。

４）中国では，マイクロティーチングが「微型教学」あるいは「微格教学」と呼ばれている。

５）楊宗義「微型教学」『西南師範大学学報（人文社会科学版）』1979年第３期，pp.97-98

6）中共中央國務院『教育工作に関する指示』1958年９月19日，『指示』の告示によって，当時の小学校から大学までの学生に生産労働と社会活動に参加することが過度に要求された。

7）1958年から，北京師範大学によって心理学が偽科学として批判されたため，教員養成課程における開講が停止された。また，教育学も強く攻撃され，教育学の教材も教授も一時的に廃止され，教育観察と実習もカリキュラムの規定のとおりに実施されなくなった。金長沢,張貴新『師範教育史』海南出版社，2002年，p.75，趙莉如「中国における心理学の発展及び現状（下）」『心理学動態』第４巻第４期，1996年，pp.1-6

8）1961年に，中央から地方まで，教師教育に関する各種の会議と調査研究が行われた。さらに，同年10月～11月にかけて，全国規模の教師教育会議が行われた。会議では，高等師範学院，学校の卒業生は教養及び科学知識において，「その程度は総合大学での同じ専門分野のレベルと同等でなければならない」，「高等師範学校は，総合大学のレベルに相当」すべきだと指摘された。

9）孟憲恺『微格教学基本教程』北京師範大学出版社，1992年

10）中国では，「説課」と称されている。

11）ハルビン師範大学音楽学院教授。

12）郁正民『音楽微格教学法』上海音楽出版社，2004年，p.3

13）郁正民「課堂教学技能訓練与微格教学－兼談音楽課堂微格教学的理論与実践」『芸術研究』2000年第３期，pp.57-60

14）前掲書１），p.22

15）郁正民の著書『音楽微格教学法』によると，変化技能は次の３つの内容を含む：

１．学生の注意を引き，教授内容を印象強く学生に残らせるための，教師の言葉，声，体などの変化である。例えば：①声の大きさ，アクセントなどの変化。強調したい授業内容を大きく，高調に話す。②音楽鑑賞の授業で，鑑賞の音楽を説明する時，音楽のメロディなどに合わせて，自分の説明の声を大きくしたり，小さくしたり，速くしたり，遅くしたりすること。また，表情も一緒に変化する。③教師の動作，例えば，手の動作，体の動作，目つきなどの変化。

２．教授方式の変化：授業方法の変化。

３．教具の変化：つまり適当な教具を使用すること。

16）孟憲恺『微格教学基本教程』北京師範代学出版社，1992年

17）郎親華「教師角色模擬教学的実践和探索」『遵義師範学院学報』第６巻(2)，2004年，pp.90-91

18）郁正民『音楽微格教学法』上海音楽出版社，2004年

19）胡艶「浅談微格教学法在視唱練耳専業教学中的応用」『芸術教育』2004年第３期，pp.41，49

20）範暁君「高師音楽教学法課程改革的構想」『星海音楽学院学報』2002年第２期，pp.78-80

21）葉巧妍「微格教学在音楽教学技能訓練中的応用」『星海音楽学院学報』第２期，2003年，pp.90-91

22）前掲書13)，pp.57-60

23）同上

24）劉学勇，周官宗「利用微格教学設施対音楽専業教学模式改革的探索和実践」『電化教育研究』総第112期，2002年，pp.55-57，60

25）万婉治「高師声楽課教学模式改革試探」『泉州師範学院学報（社会科学)』第23巻第１期，2005年，pp.137-139

26）李暁燕「高師音楽教育専業学生『説課』微格教学設計与評価研究」『楽府新声』2004年第３期，pp.68-71

27）彭涛『説課理論与中学実践研究』華中師範大学修士論文，2005年，p.4

28）王維平「微格演課－教研組活動的一種新途径」『教学与管理』1996年第１期，pp.19-20

29）前掲書26，pp.68-71

【参考文献】

D．アレン，K．ライアン（笹本正樹，川合治男共訳）『マイクロティーチング：教授技術の新しい研修法』，協同出版，1979年

孟憲恺『微格教学基本教程』北京師範大学出版社，1992年

姜言霞『化学微格教学的研究与実践』山東師範大学修士論文，2004年

申義陽「微格－相似誘導教学法及其理論基礎初探索」『菏沢師専学報』第18巻(4)，1996年，pp.56-59

王維平「微格演課－教研組活動的一種新途径」『教学与管理』1996年第１期，pp.19-20

楊海東『微格教学在高師体育教育専業教法課中的応用研究』東北師範大学修士論文，2004年

楊作龍　楊淑芝「微格相似誘導教学法的理論構造与実践」『洛陽師専学報』第15巻(6)，1996年，pp.93-100

袁祖栄「説課与微格教学的結合探析」『重慶教育学院学報』第18巻(1)，2005年，pp.94-98

張祖志「微格討論式説課初探」『実験教学与儀器』1999年第７-８期，pp.49-50